脱施設化ガイドライン案への世界のコメント（2022年6月）　No.67

**リュドミラ・ボリソバ（スタラ・ザゴラ州、ブルガリア）**



And

Network of Independent Experts – NIE

**Written submission**

From Luydmila Borisova

to the Committee on the Rights of Persons with Disabilities (CRPD)

ヴァリディ財団、独立専門職ネットワーク

リュドミラ・ボリソワ[[1]](#footnote-1)からの書類提出

（障害者権利委員会宛て）

この意見は、独立専門職ネットワーク（NIE、ブルガリアを拠点とするNGO）に文書として提供されました。これは、ヴァリディ財団（Validity Foundation）の支援を受け、NIEが翻訳したものです。翻訳以外の編集上の変更はありません。



意見：

リュドミラ・ボリソワ、スタラ・ザゴラ出身、48歳で、現在身体障害者成人ホームで暮らしています。2002年から「ロデナ（Rodina）」（「ふるさと」と言う意味）という図書館で働いています。給料はあまりよくありませんが、仕事は好きです。主に古書のデジタル化を担当していますが、これは教師や学生、市民全体に役立つものです。

高校では経済学を専攻しました。アニメーション作家になるための勉強をしたかったのですが、当時は私の障害が学校の管理職を「怖がらせた」らしく、それは不可能でした。そこで私は芸術の代わりに会計と経済を学びました。これは、目に見える障害のある人を制度がどのように扱うかを示しています。数年後、私は社会サービスの学士号を取得し、私の目標は障害者分野で自分の知識を生かすことでした。その後、私はこの仕事が好きだったので、図書館学の修士号を取得しました。

\*\*\*

私は本を読むのが好きで、特に心理スリラーが好きです。絵を描くことが好きで、「究極の旅と経験」に耐えること（to endure in extreme travels and experiences）も好きです。馬に乗ったり、パラグライダーやオートバイに乗ったりと、チャレンジすることが好きです。☺ 小さなグラスでお酒を飲んだり、いろいろな食べ物に挑戦するのが好きです。友達とパーティーをするのが好きで、大音量で音楽（とくにオルタナティブ音楽）を聴くのが好きです。

\*\*\*

この15年間、ブルガリアでは施設収容の廃止は起きません。他の選択肢がなかったため、多くの人が同意した上で、施設に収容されているのです。ブルガリアの法律は、施設収容の終了に関する国際法に準拠していません。

1. 施設収容は個人のスペースを確保する権利を奪います。施設の定員や管理者と呼ばれる人たちの決定によって、1つの部屋に2人、3人、4人、あるいはそれ以上の人たちが一緒に収容されます。施設に入る理由はさまざまで、屋根（住む場所）がない、子どもの頃から施設にいる、家で生活できないなどです。

2. 責任感を失い、言い方は悪いが、「文句ばかり言う」人になってしまう人もいます。子どもの頃から施設暮らしで、自分の人生に責任を持つということがどういうことなのか分かっていない人たちです（特に、かつて借家暮らしで絶望的な気分だった私は、そのことに気づくのに時間がかかりました）。他の人たちは世話をすることができない家族に育てられ、施設に入れられます。家族も障害者も国から十分な支援を受けられないからです。また、国の保護機能のために、仕事や何らかの訓練を探すことなく、国から受け取る年金に満足している人もいます（私が念頭に置いているのは、バリアフリー環境やパーソナル・アシスタントなどの形で支援を必要とする身体障害者のみです。通常の環境で生活できるために別のタイプの支援を必要とする精神障害(mental disabilities)者については話が異なります）。

3. 適切なサービスを受けられるように導かれるのではなく、また住みたいと思う所に住むよう導かれるのでもなく、新しい施設を建設するのは間違っています。さらに、自宅で生活している人でさえ、不十分な支援のために、自立した意思決定ができず、小さな施設にいるような状態になっています。身体障害があるだけなのに、独立した意思決定者とは認められていないからです。障害者の世話をせざるを得ない両親や親族は、（施設にいるような）介護者の役割を引き受けることが多く、それは、一部の人々のメンタリティやこの分野の情報不足のために、障害者を取り巻く政治が誤って理解されているために起きています。過保護は、自立した意思決定をする能力を奪います。「今日の子ども」が、責任を負う能力を持った「明日の大人」にならない（訳注　「なる」の誤記か）と考えるのは間違っています（精神障害がある場合は、保護者や他の支援の助けを借りなければなりません）。家族全体を適切にサポートすることが非常に重要です。

4. 手ごろな価格の住宅への支援、個々人の能力に合った場所が提供されることが適切です。（ブルガリアでは、国が住宅を提供すれば十分であり、その住宅がバリアフリーであるかどうかや、本人が特別な支援を必要とするかどうかは考慮されません。一人暮らしを望んでも、状況によって、すぐに施設に戻らざるを得なくなったり、致命的な結末を迎えるケースも多いです)。ブルガリアにおける社会サービスの提供は、常に「閉じたサービス」として想定されており、社会サービス法でさえ正しく書かれていません。地域に根ざしたサービスを提供すると書かれていますが、その「地域に根ざしたサービス」と呼ばれるものは、実際には居住型サービスであり、すべての人のニーズに合わせたものではありません。(この点については言いたいことはたくさんありますが、ガイドラインが十分にカバーしています）。

5. 施設に入所するもう一つの重要な理由は、差別がある場合、その人自身がその生活環境を良く思っておらず、「仲間」の中にいることを好む場合です（恐ろしいことですが、私は何十回も聞いたことがあります。私は私と同じような障害のある人を好きにはなれませんでした。彼は私が「仲間」を恥じていることにすぐに反応しました。こうして私は彼が嫌いだと答え、彼とは話したくありませんでした。） 差別的慣行は一般的であり、法的保護の可能性はごくわずかです。

6. 法的枠組みをまとったもうひとつの悪質な慣行は、障害者は社会的に弱者でなければならないと考えられていることです。要するに、議員の目には、すべての障害者は自動的に社会的弱者と映るのです。例えば、市営住宅を借りる際の所得基準は最も重視され、障害者は他の社会集団（これも必然的に社会的に不利な立場にある）と「対等な立場」にあるとされます。私たちのような国では、制度があっても、勉強し、働き、太陽の下の自分の居場所を探さなければなりません。私の個人的な人生経験は、周囲の環境や状況にかかわらず、できる限り自立して生きることなど、多くのことを教えてくれました。これは、ブルガリアには個人へのアプローチがなく、人間への敬意がなく、障害を持ちながらも勉強し、働き、家庭を築いている人の尊厳が尊重されていないことを証明するもう一つのケースです。障害を持ちながらもこれができているのは友人たちの助けによるものであり、国家の助けによるものではありません。運動障害のある人と聴覚障害のある人を比べることはできません。たとえば、一方が5段や50段の階段を上ることができても、もう一方には不可能です。また、移動補助具を受けるためには、社会的に不利な立場にあるか、その移動補助具を受ける必要があるという障害認定（ТЕЛК）を受けていなければなりません。例えば、私は自分で移動補助具を用意する必要があります。なぜなら、決定権者やどこにでもいる医者の目には、私は歩けるに違いないと映っているからです。しかし、私は自分の運動能力の限界がどこまでなのか、そしてどの程度可能な限り動けるようになりたいのかを知っています。(このことについてはいくらでも語れますが、そんなことはどうでもいい......、私の考えでは、ガイドラインには補助具を提供するというテーマも明確に示されています）。最後に、医療機器と移動補助具が同じものであり、保健省というひとつの省で管轄されるべきだと考えるのもナンセンスであり、補助具というテーマのパロディであることを付け加えておきます。

7. 言いたいことは山ほどありますが、最も重要なことは、障害者が選択権を持たなければならないということです。施設に入れられる子どもは一人でもいるべきではありません。家族には十分な支援が提供されなければなりません。サービスはその人を中心に組織されなければなりません。それぞれの人への個別のアプローチが必要だということです。世界がこれほどカラフルなのには理由があります。世界は無数の個人で溢れており、それぞれがユニークな機会を隠し持っているからです。

追伸：私は現在も施設で暮らしていますが、他の多くの人たちとは異なり、私の認識では、施設は戻って食事をして寝ることができる場所です。だからといって、自分の居場所を得ようとしなかったわけではありません。それを証明する事実があります。これが単なる「願いごと」でないことを切に願います。

注：本投稿で提示された見解はLuydmilaのものであり、Luydmilaが協議プロセスに参加することを可能にした団体の意見を必ずしも反映するものではありません。

（翻訳：佐藤久夫、尾上裕介）

1. 著者は障害のある人です。 [↑](#footnote-ref-1)